

# 図書館長賞

Every day is a new day.

老人と海 / 新潮社  
情報工学専攻 修士2年 海老原 樹

「老人と海」は世界的名著であるが、物語は非常に簡潔である。苦勞の末、大魚を手にするも鮫に食べられてしまう、という物語である。それでも本書が人々に感銘を与え続けている理由として、私を感じた3つの魅力を紹介する。

1つ目は、客観的な描写である。これによって、老人の孤独はより際立っており、唯一人海に小舟で漂う様子が目に浮かんでくる。老人は何度も独り言を繰り返す。魚や鳥に救いを求める。大魚と闘いながら、孤独とも戦う老人の苦しみかひしひしと伝わってきた。

2つ目は、飾らずに描写された自然の厳しさである。仕掛けに大魚がかかるまで、老人は84日間の不漁に耐えた。大魚を仕留めるまでの4日間は、ほとんど不眠不休で綱の調節を続けた。しかし帰路の最中に大魚は鮫に全て食べられてしまう。老人も、大魚も、鮫も、全ての生き物が必死に生きていることに心を打たれ、自然の厳しさを痛感した。

3つ目は、老人の逞しい生き様を通して描かれる人間の強さである。老人は不運の中でも闘いを辞めない。必死の思いで手に入れた大魚を鮫に奪われた時でも、彼は「人間は負けるように造られてはいないんだ」という。気高くて立派な存在ではなくとも、不屈の精神を持つ老人の姿に、人間の強さを強く感じた。苦しい時にはぜひ本書を読んで頂きたい。本書は、読み手にとっての海に向かって漁に出る勇気を与えてくれる一冊である。



『老人と海』  
ヘミングウェイ著 福田恒存訳  
新潮文庫刊 B933|H

# 紀伊國屋書店賞

身近なあいつは悪くない!??

外来種は本当に悪者か? 新しい野生 / 草思社  
ホームエレクトロニクス開発学科 中村 光貴

外来種という言葉には必ずと言っていいほど負のイメージがついてまわる。狩猟なネズミ、捕食性のクラゲ、はびこるスーパーウィード、ブラックバス---よそ者の外来種が幅をきかせている。人の動きに便乗してやってきたり、気候変動に乗じて新天地へ進出したりする。それらがやってきたせいで在来種の居場所は無くなり、絶滅してしまう種もある。このような状況を外来種という言葉一つで連想してしまう。本当に外来種は悪なのか? 本書は今までの固定概念を考えさせられる一冊だ。

本書は3部構成となっている。1部で外来種は有害な侵略者というよりは、実際は人間のせいで荒廃した生態系に上手く入り込んだだけということ。2部で外来種の影響や、環境保護の方法に対する私たちの考え違いがこっけいな結果を生んでいる現状。3部では異質なものの、見慣れないものをいたづらに恐れるだけでは先に進まない。外来種の自然の再生力を利用して新しい自然(NEW WILD)を再構築していく必要があると述べられている。

この本を読み、自然の復元力にとっても驚いた。そして、外来種に対する考えを気にするきっかけとなった。我々も外来種を運んできておいて土地に合わなかったから駆除という考えは改める必要がある。はるか昔からこの地球上では種の世代交代が行われてきた。弱者の肩ばかりを持つのではなく強者の影響力にまかせてみるのもいいのではないかな。



『外来種は本当に悪者か? 新しい野生』  
フレッド・ピアス著 藤井留美訳  
草思社刊 468|P

# 図書館 Café



第6号  
Vol.6 No.2

発行 / 神奈川工科大学附属図書館 2017.3.31



神奈川工科大学読書コンテストは、学生の主体的な学びを励まし、文章作成・発表の実践力を培うことを目的として、基礎・教養教育センターと図書館の共催で開催しています。審査方法は、読書感想文による1次審査、および図書館1階での公開プレゼンテーション審査となっており、最終的に学長賞・図書館長賞・紀伊國屋書店賞および優秀賞が決定され

ます。3年目の今年度は、全学から34作品の応募があり、11月23日(水)5限に開催された最終審査では、個性溢れ、見応えのあるプレゼンテーションが繰り広げられました。

本図書館 Café Vol.6 No.2 (読書コンテスト特集号) は、最終審査に進んだ10名の受賞作品の全文を掲載いたします。ぜひ、今後の読書と学習の参考にさせていただければ幸いです。

# 学長賞

愛する妻が突然5歳児になったら

わたしはサムじゃない / 扶桑社  
情報ネットワーク・コミュニケーション学科  
井上 千奈音

パトリックとサムは結婚から8年経つ今でも深く愛し合っている。しかし、そんな夫婦にある日突然悲劇が訪れる。妻に幼児退行が起き、精神が5歳児になってしまうのだ。

自身をリリーと言い張るサムは、医者からは「多重人格」と診断され、精神科医を進められる。だが、なぜかそこへは連れて行かないパトリック。

はたして本当に多重人格なのか、私の推察では、私はサムがリリーになった原因を「憑依」とした。これは、解剖医であるサムは、数年前虐待を受け死んだ子供を担当した。過去には自身も幼少期に虐待を受け



『わたしはサムじゃない』  
ジャック・ケッチャム、  
ラッキー・マッキー著  
金子浩訳  
扶桑社刊 B933|K

ていた経験がある。その二つがシンクロして、そう考えたのだが…。  
著者は、現代人の多くが問題として抱えていることをテーマの一つとして描いている。それは「不妊」である。パトリックとサムも不妊で悩む夫婦の一組であったのである。近年、TVなどで聞くワードだからこそ考えさせられるものがあつた。

また、この作品を読むことによって「幸せ」の裏に隠された「嘘」を捉えることができる。生活する上で必ず付くであろう「嘘」それが作品と絶妙に絡んでいた。だからこそ、私が以前ついた「嘘」について、はたして善であったのか悪なのか、考え直すきっかけとなり、今後の行動へと大きく関わる作品のひとつとなった。

この作品は、一篇では、パトリック。二篇では、サムの目線で物語が進められている。そのため、男性なら女性。女性であれば男性の普段とは違う見方のできる作品となっており、両者の立場で読み解くことができるであろう。



# 総評

審査委員長/基礎・教養教育センター教授  
尾崎 正延

今年度は恒例化した読書コンテストに30余名の応募があつた。積極的に応募した学生に敬意を表したい。第一次、第二次の選考過程では順位が伯仲していたが、プレゼンの良し悪しで各賞が決定した感があつた。



附属図書館長/ロボット・メカトロニクス学科教授  
小川 喜道

今年度は応募者数が少なかったものの内容の充実したコンテストでした。特に小林多喜二『蟹工船』というプロレタリア文学を取り上げた応募には感動しました。図書離れと言われていますが、ヘミングウェイ(1954年ノーベル文学賞)から今活躍中の朝井リョウまで幅広い作品に触れることができ審査員の一人として楽しませていただきました。



## 優秀賞

### 星における人間の役割とは？

#### 捕食者なき世界 / 文藝春秋 情報ネットワーク・コミュニケーション学科 高橋 陸

捕食者と聞くと誰もが恐怖や嫌悪の感情を抱くと思われます。
獰猛なライオンやサメは時折人間に襲い掛かり、その事例が捕食者という存在に悪いイメージが抱かれています。しかし、捕食者は生態系に非常に大きな役割を果たしていることに、多くの人は気付いていません。この本には、その捕食者がいなくなった場合、環境にどんな影響が出てしまったかが記述されていました。その中でも特に衝撃的だった事例はイエローストーンの狼の話です。
猟師達が獲物であるワピチを増やすために、邪魔者であった狼を虐殺したのです。その結果、大量発生したワピチによってイエローストーンの植物群は壊滅状態に追い込まれてしまった。ほかにも人間が原因で環境の変化が起こった事例が多数存在します。自分のことは棚にあげ、地球環境を平気で変えてしまう人間とは何なのか改めて考えさせる本でした。人間は捕食者なのか、または共生者、略奪者なのか？人間がいなければ、この星は何万年もの間、自然が豊かな星になっていたはずなのに、この星はホモサピエンスを人間に進化させた。それは星が自分という存在を破壊・捕食する存在が必要であったから人間を誕生させたと私は考えています。地球も細胞と同じように一個の生命体であり、人間もそれに組み込まれている。これはあくまで化学的見解であり、哲学・倫理学などの書物も読み、自分なりの答えを見つけていこうと思います。
それだけこの本は私にとっては衝撃的な内容であり、新しい知識を得られたことに欢喜しています。

### 人間の強さ

#### 脳が壊れた / 新潮社 情報工学科 深澤 薫平

まず感じたのは「壮絶」の二文字である。著者は18歳の時に実家を飛び出し、両親に頼らず20代前半をいわゆるブラック企業で働く。27歳でフリーライターとして独立し、その後2011年秋に妻が脳腫瘍を発病。一命をとりとめたが、再発の確率は非常に高い病であり、再発防止の治療を行う中で2015年夏、今度は著者自身が脳梗塞を起こし、いくつかの後遺症を残したまま現在へと至る。

本書は脳梗塞を発症し、脳の機能障害を患った著者の経験が、過去の振り返りと共に書かれている。一見すると暗い内容ばかりだが、読み進めていくと不思議なことに笑えるのだ。文章の所々に散りばめられたユーモアが、辛い経験をそのまま伝えるのではなく、読みやすい構成へと整える役割を果たしている。

絶望的な状況の中でも、後遺症の感覚を文字に起こそうとした、心の強さにも驚かされた。「今まで出来たことが出来なくなる」。発症直後

握った左手を開くことも本を読むことも困難になった著者は、それでもこの受け入れ難い変化を詳細に分析し、具体化して表現しようと考え、本にした。誰にでも出来るようなことではない。

本書の発行は2016年6月20日。著者は発病して一年とかわからずに、本を執筆するまでに回復している。人間の強さと可能性を感じるには十分な一冊だ。

### 人を傷つけること

#### 他人を傷つけても平気な人たち / 河出書房新社 栄養生命科学科 人見 奈生子

私達人間は他人に傷つけられた事はよく覚えているけれど、実は自分が他人を傷つけた事に関しては気付かなかったり鈍感だったりする。自分はこういう事をされて傷ついた、という一方、自分の何気ない一言や行動が相手に不快な思いをさせてしまっている事にどれだけの人が気付けるだろうか。自分が傷つけた相手から何らかの怒りの言葉があれば分かる事も、無意識でしてしまった事で相手を傷つけてしまい相手からのアクションが何もない場合は、気付く事のないまま過ぎて行ってしまう。人は、自分の気付かないうちに他人を傷つけてしまう場合が多々ある。だが、悪意を持って初めから悪い事だと分かっているながら他人を傷つける人も実は少なくない。私はこのような人達の心理がどういったものなのかを探るべく、今回この本を読む事にした。裏切り、暴言を吐く、窃盗、嘘をつく、仲間外れにするなど人が人を傷つける方法なんていくらでもある。この本には、平気で嘘をついたり平然とした顔で人の物を盗むなど、一見普通の人間に見えて実は道徳の外れた人間の心理が描かれている。もしあなたが友人から普通では考えられない様な事で傷を受けた時にこの本を読んでみると、その友人の本当の内側を知るきっかけやヒントになるかもしれない。

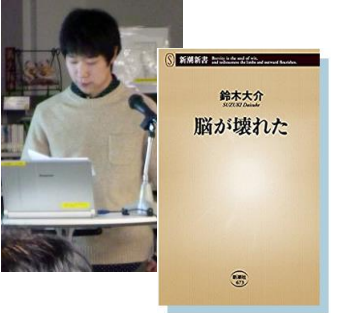
『他人を傷つけても平気な人たち』 杉浦義典著 河出書房新社刊 493.76|IS

### 『何者』にもなれない

#### 何者 / 新潮社 応用化学科 石野 瑠菜

“私は他人とは違う”、“俺にはもっと出来るはず” あなたは今まで、そんな風に考えたことはないだろうか。

本作品は、登場人物のSNSでの呟きと共に、主人公の目線で進行していく。まわりを観察し、どこか冷めたように就活や他人を分析する主人公。そんな彼に共感し、まるで自分も同じように俯瞰で物語を観察しているような気になってくる。しかし、読み進めるうちに少しずつ疑問を抱き、主人公の“陰”に気が付いていく。私はこの時、パズルのピース



『脳が壊れた』 鈴木大介著 新潮新書刊 916|IS

が揃っていくような感覚と同時に、何とも言えぬ不安に襲われた。

他人を見下して、自分は上だと思ひこむ。それは誰にでもある“陰”なのかもしれない。主人公の裏側を暴いていく友人の言葉は、同じように裏側を持つ私のことも見透かしているようで、深く心に突き刺さった。

SNSでも、就活でも、人は皆仮面を被っているようなものなのだと思う。自分がなりたい自分、他人とは違う自分。そんな『何者』かを作り、『何者』かになろうとする。勿論、私もその一人だ。しかし、いくら演じようとしたちは、何者にもなれない。

どれだけかっこ悪くても、理想とは程遠くても、全て受け入れて前に進もう。『何者』を読んで、私はそう決意した。

#### 『何者』 朝井リョウ著 新潮社刊 913.6|IA

### 意思

#### 終末のフール / 集英社 応用化学科 岡村 勇斗

あと八年で地球に隕石が落ちる。そんなニュースが報道され、人々は逃げ場のない地球で必死に逃げ惑った。そして、そのニュースから五年後、人々は隕石衝突の報道がある前とは違った日々を送っていた。

私が初めてこの本を読もうと思ったときに想像していた内容は地球に隕石が衝突するという状況で人々がその状況を如何に打開していくかが描かれていると思っていた。しかし、この「終末のフール」という本には私たちが普段暮らしているような日常が描かれていた。

三年後に隕石が落ちる日常というとても想像できない奇妙な状況でありながら不思議とそこに違和感は無く、物語に引き込まれていった。そして、そこには残りの三年間を生きている人々の強い意思が描かれていた。

この本に描かれた人々の意思は生きることにに対する意思や自分の人生に対する意思などの未来のための意思で自分がこれから生きていく中で持っていないてはいけないものを示してくれた。そして、そのような意思を持ち、少しでも誇らしい自分で在りたいと強く思った。

### 蟹工船

#### 蟹工船 / 新潮社 情報ネットワーク・コミュニケーション学科 田端 祐介

蟹工船はプロレタリア文学の中の有名な作品の一つです。プロレタリア文学とは1920年代に流行った文学であり、個人主義よりも社会主義や共産主義を思わせる文学です。しかし当時の時代の背景により厳しく取り締まられた文学でもあります。

本作品では、オホーツク海のカムチャッカ半島の海で蟹を獲る労働者たちのお話となっています。

労働者たちの仕事内容は蟹を獲り、その場で缶詰に加工するという内容なのですが、当時蟹工船は「船」でも「工場」でもみなされなかったため航海法や労働法規も適用されていませんでした。それをいいことに資本側は極端に安い賃金で働かせ、監督は労働者たちを人間扱いせず、倒れた労働者に海水をかけて無理やり起こさせたり、作業効率の悪い労働者に罰を与えたりと酷使していました。しかし、最初はあきらめていた彼らも工船の中の様々な出来事で労働に対する意識が変わりどのようにしてストライキを起こしていったのか、また、ストライキの先には何が待っていたのかという作品です。

この作品は約100年前近くになる作品ですが、今日のいわゆるブラック企業・ブラックバイトに何か通ずるものがあり、現代社会と照らし合わせても十分考えさせられることがある一冊です。

#### 『蟹工船 党生活者』 小林多喜二著 新潮文庫刊 B913|IK

### 赤毛のアンを読んで

#### 赤毛のアン / 角川書店 ホームエレクトロニクス開発学科 田村 晃一

最近、私は小学生の頃に読んでいた赤毛のアンをふと読み返してみた。小学生の頃とはまた違った視点を持って読むことができて純粋に読書をした感想とはまた違う感想が生まれた。

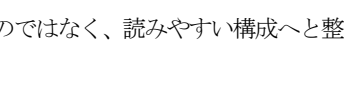
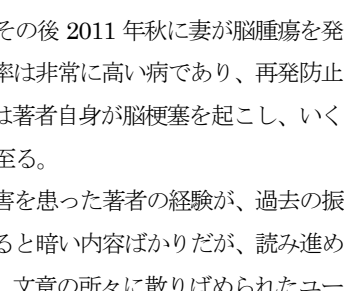
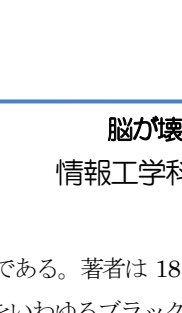
昔は純粋に物語の世界観を楽しみアンの成長を楽しみながら読んでいた。この本はとても文章が美しく、アンを取り巻く周りの環境も魅力的で続きをワクワクしながら楽しめる本である。しかし今はその感想よりも先に物語を現代や自分を投影しながら読むようになっていた。現代のニュースを見ていると世界が病んでいることが分かる。ニュースを見ていると暗くなることばかりだ。過労での自殺、企業の不正などのニュースが軒を連ねている。また、自分自身を顧みてみると、都合の悪いことなど問題からたくさん逃げて誤魔化してきた節が多々ある。しかし主人公のアンは自分の心に嘘をつかず不正を誤魔化さない。とてもまっすぐな生き方をしている。読んでいて私はアンの生き方をうらやましく思った。

今回、赤毛のアンを読み直して思ったのだがこの本は単に物語が面白いだけではなく自分自身の生き方の変化に気付かせてくれる本ではないのかと思った。私はこの本を読み直して自身の生き方を見つめなおすことが出来た。また年を取ったら読み直してみようと思う。その時の感想が非常に楽しんだ。

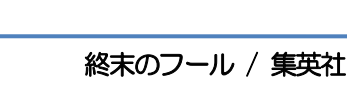
『赤毛のアン』 モンゴメリ著 中村佐喜子訳 株式会社KADOKAWA B933|IM



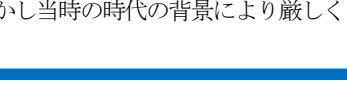
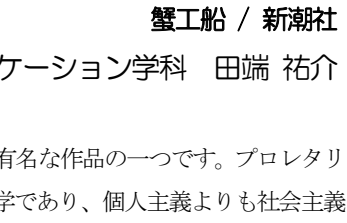
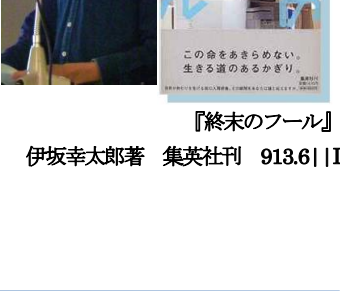
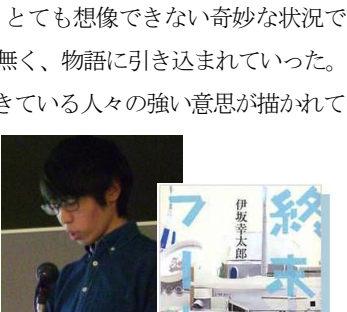
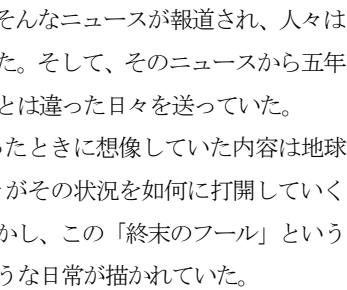
『捕食者なき世界』 ウィリアム・ソウルゼンバーグ著 野中香方子訳 文藝春秋刊 B468|IS



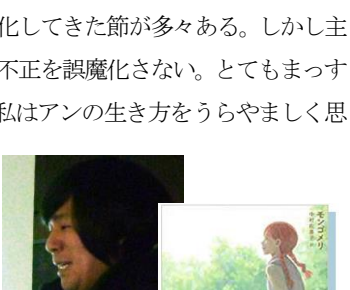
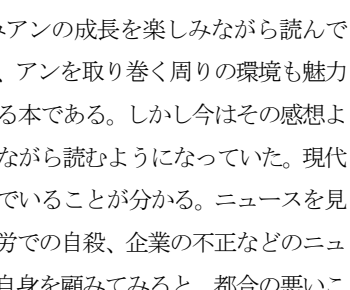
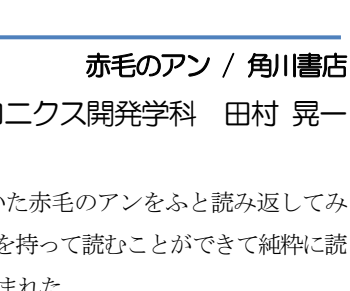
『何者』 朝井リョウ著 新潮社刊 913.6|IA



『終末のフール』 伊坂幸太郎著 集英社刊 913.6|II



『蟹工船 党生活者』 小林多喜二著 新潮文庫刊 B913|IK



『赤毛のアン』 モンゴメリ著 中村佐喜子訳 株式会社KADOKAWA B933|IM